

S27c 小口径望遠鏡による活動銀河核の CCD 分光観測

田辺健茲、今村和義、國富菜々絵 (岡山理科大)

近年コンパクトで低価格の小口径望遠鏡向き可視分光器が入手できるようになり、輝線星などの恒星や激変星（特に新星）の分光観測に使われ始めている。そのうち SBIG 社の分光器 DSS-7 は恒星よりも星雲や銀河などの拡散天体の分光に適するように設計されている。

銀河は、その表面輝度の距離依存性が弱いので、分光観測に際し恒星ほど等級依存性が大きくないことが予想できる。また、分光器の適応する F 値が小さければ、輝度は F の 2 乗に反比例して明るくなると考えられるので小口径の望遠鏡でも小さい F 値を選べば銀河の分光は可能であると予想される。

今回、我々はこれまでの輝線星の分光観測の経験を踏まえて輝線を出す銀河の分光観測を試みた。用いた望遠鏡は Celestron の C11 (口径 28cm) F10、分光器は DSS-7 ならびに SGS (いずれも SBIG 社製) である。例として、輝線星に似たスペクトルを示す Seyfert 銀河 (あるいは活動銀河核) NGC1068 のデータを紹介します。露出時間 2 分、得られた輝線は H α 、ならびに O (2 本) でこれらに対する赤方偏移の平均値は 0.004 であった。この値は文献値と合っていると思われる。その他の観測についてはポスターで紹介する。